

大橋良介氏が、ケルン大学でのモルフォーマタ・プロジェクトのフェローに引き続き、来年夏学期も同大学哲学科客員教授として、ドイツでの滞在が長期化することにより会長職を続けることができなくなり、辞意を表明しました。皆様もご承知の如く、これが先の総会でも承認されました。これに伴いまして、平成二十二年十一月七日に京都工芸織維大学にて理事会が開かれ、出席した理事会上りにより、私が選ばれましたので、大橋前会長の残任期間の会長職をお引き受けすることにいたしました。大変に責任のある仕事をおこなうべきです。

世界に広がるとしています。例えば、来年は西田哲学の実質上の出発点となつた『善の研究』の出版百年目の節目にあたります。これを記念して、国内で

西田哲学会会長をお引き受けするにあたつて

松丸壽雄

この哲学会は、日本における多くの学会とは異なり、研究者のみならず、研究者以外のいわゆる一般の人たちも、西田哲学に関わる事柄に興味と探求心を持つ人であるならば、学会員となることができる点に、際立った特徴を持っています。これは、西田哲学が影響を与えてきた裾野の広さを物語ると同時に、多くの人々が西田の哲学に魅せられ、その真意を究明したく思つてゐるということです。この期待に対して、研究者は解り易い仕方で、手引きを与えるければならないと思います。西田哲学会年次大会は、これを具体化する機会となるように、私としては心を碎くつもりであります。

西田哲学会第八回年次大会は、これまでの西田哲学の歴史を振り返る機会となるように、私としての西田哲学会の歴史を振り返ることで、この裾野は大きく世界に広がるとしています。例えば、来年は西田哲学の実質上の出発点となつた『善の研究』の出版百年目の節目にあたります。これを記念して、国内で

西田哲学会会報

第八号

題字 上田閑照

発行・西田哲学会事務局
〒九二九一一二六
石川県かほく市内日角一番地

電話(075)283-6600
石川県西田幾多郎記念哲学会館内

西田哲学会第八回年次大会報告

西田哲学会第八回年次大会が、平成二十二年七月二十四日(土)、二十五日(日)の両日、御茶ノ水駅からすぐの明治大学駿河台キャンパスにて開催されました。

二十四日の午前はブレカンファレンスとして、恒例の一般

『善の研究』勉強会」と、今大会で三回目を迎える外国語セッションが行なわれました。講読会は米山優氏と白井雅人氏が担当し、『善の研究』第二編第九章「精神」をテクストに、西田の言葉に肉薄した一時間半をもちました。

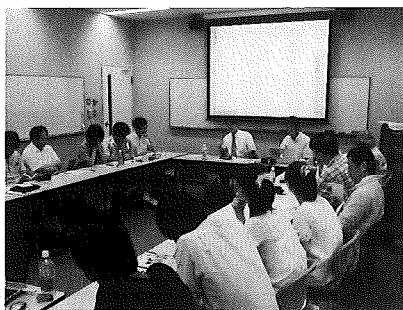
同日午後の講演会では、板橋勇仁氏(立正大学)の司会のもと、竹村牧男氏(東洋大学学長)の「西田幾多郎の禅思想をめぐって——逆対応から平常底へ」、続いて今道友信氏(東京大学名誉教授)の「西田先生と私——運命的緊張の永続」という二つの講演が行なわれました。竹村氏の講演では、西田の禅思想を中心としたがらも、そこにおいては自我・他の枠組みすら崩れ去る「宗教の客観的事実」が、西田の最晩年の術語

て、これに相応しい活動を開いていくのも西田哲学会の重要な課題だと思います。それと同時に、来年の七月月中旬の年次大会も宇ノ氣の地にて、活発な議論を呼び起こすものとしなければなりません。

今述べてきましたような様々な仕事を、私ひとりでは到底でないに交流を活発にできる基盤作りに努めたいと思っています。

『善の研究』刊行百周年を機に、日本独自の特別企画を立てけるように、私としては互いに交流を活発にできる基盤作りに努めたいと思っています。

記念哲学館のご助力、そして何よりも会員の皆様のご協力無くしては成りません。皆様、なにとぞご支援をくださいますようお願い申し上げます。



プレカンファレンス

りわけ印象的だったのは、副題の「逆対応」と「平常底」を繋ぐからが、他者へと向かう働きに焦点のあてられた助詞だということです。竹村氏は講演を終えるにあたって鈴木大拙の「ただ滅茶苦茶に働くのだ、働いて働くいて働きぬくのだ」という言葉を取り上げ、個と絶対との否定を介した関係が、そのままに苦悩の只中にいる他者へと向かう働きとなり、それがまさに「平常底」であることを、わたしたちに示してくださいました。また今道氏はご自身の半生を振り返る中で、多感な中学・高校時代に経験した西田哲学への憧れと挫折を語ると共に、最晩年の西田との個人的交流によって現在の今道氏があることを冗談を交えながら生き生きと語られました。とりわけ、西田が死の間際まで当時まだ若い学生であった今道氏を自宅に招き、自筆の書を贈ったエピソードや、西田との交流の中で「ロゴスを深めることは中世を追い越すこと、中世はアウグスティヌスを土台としているから、アウグスティヌスを追い越さなければならぬ」と西田から教えを仰いだエピソードでは、今道氏は時折言葉を詰まらせ、会

今道氏を通して、まさに西田が直に生きて語ったのではないかと錯覚すらさせる、そのような濃密な講演でもありました。翌二十五日午前の研究発表では、次の四氏の発表が行なわれました。中嶋優太氏（京都大学）「意識の問題」における芸術的経験の位置、近藤正樹氏（立命館大学）「善の研究」における純粹経験と生命、日高明氏（京都大学）「働くものから見るものへ」における言語の問題、「西田、ジエイムズ、パノア校」西田、ジエイムズ、パースの比較試論——克服されるべき心理主義とは何か。中嶋氏は中期西田哲学における芸術経験の独自性を西田の人格概念との連関から取り上げ、近藤氏は現職の臨床心理士としての立場から西田哲学における生死の問題を扱い、日高氏は西田の判断論との関わりから言語が包摂的な系列において他の概念との区別により限定される意味を持つと指摘し、石田氏は「純粹経験」という術語の継承から從来西田論理学者パースとの親近性が強調を好み・広がる論理的世界を共に見ていたという点でむしろにされる中で、一個人の意識体論を提示します。

ら多くの質問が出され、充実した研究発表となつたことをここにご報告いたします。

シンポジウム概要

とさせていただきます。

場もまた今道氏と共に西田を追憶する時間が与えられました。

した。いづれの発表もフロアから多くの質問が出され、充実し

る。つまり、通常の身体論のよ
うに、精神と物質、理論と実践

（文責・石井砂母里）

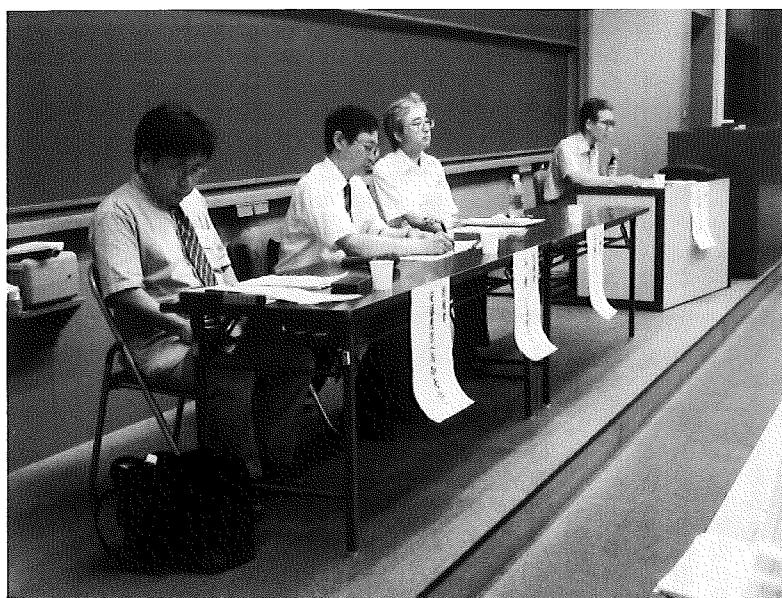
シンポジウム概要

二〇一〇年七月二十五日、西田哲学会第八回年次大会の二日目の午後に、例年通りシンポジウムが開催された。本年度の共通テーマは「身体」であった。

このテーマに託された狙いは、西田哲学を身体という問題との関係で見ることの意義をあらためて検討することである。西田哲学の独創性と魅力は、あえて一言で言うとすれば、その思索の「根底性」と「現場性」の強固な結びつきにあるといえよう。「すべてがそこからそこへ」と動く「そこ」を凝視しつづけたこの思索が、にもかかわらず単なる抽象的な思弁に陥ることはなかったのは、その「深き根柢」が、つねに絶対的な「今・ここ」と一体の事柄としてとらえられていたからである。そして、われわれが身体的な存在だたといえる。この主題は、後期の西田哲学において、「歴史的身體」という独創的な概念となつて浮上した。そこでは、身体の問題をめぐって驚くほど豊かなアイディアが開陳されてい

る。つまり、通常の身体論のように、精神と物質、理論と実践の関係といった問題にとどまらずに、表現や制作という事象と芸術および科学技術の成立根柢という次元で身体の問題がもちり出されるのである。

このような途方もない広がりをもつ西田の身体論であるが、西田自身には、彼がその晩年に次々と提示した斬新なアイデイアを十分に仕上げるための時間は残されていなかつた。西田が遺したものから何をどのように引き出していくかは、われわれの側に託された課題であるといえる。この課題に応えていくためのひとつ手立てとして、今回シンポジウムでは、広い意味での西洋現代思想において注目すべき諸々の身体論との突き合わせを試みた。十九世紀末から現在に至るまでの西洋哲学においてそれ以前と大きく異なる点の一つが、身体に関する考察が哲学的思索の中心に躍り出たことだというのは異論の余地がないところであろう。巨視的に見れば、西田哲学もまたそうした潮流に棹さすものとみなしうるのである。



シンポジウム「身体」

の三氏に、それぞれベルクソン、現象学、ニーチェにおける身体の位置づけについて、西田との関わりを意識しつつ語っていただいた。まず安藤氏は、ベルクソンと西田が共に、唯物論と唯心論、实在論と觀念論の対立をそれぞれの側の立場の不徹底から生じたものとみなし、そうした対立を乗り越えようとした思素を作り上げようとした点で、「人が志を同じくしていることを強調された。その上で、

後期西田において顕著になつてきたベルクソン批判が、彼がベルクソンと共有していた課題を徹底して遂行するためのものであつたこと、その点から見れば、西田のいう世界の表現的自己限定は『物質と記憶』のイメージ論の徹底化であり、歴史的身体としてのイマージュの限定』という発想の徹底化とみなしうることを主張された。次いで谷氏は、現象学がそこへといおな

う「事象そのもの」とは「現象が・現象化してくる」という動的事態の全体を指しており、とりわけ現象化という「動詞的」な運動が現象学という「名詞的」な事態に対し超越論的な位置にあることを確認した上で、では「身体が・身体化してくる」というのはいかなる事態なのか、といふ問いを立てられた。そして、いわゆる「キネステーゼ的意識」が一方では「物」という名詞的な現象を手引きとしつつ、他方では「私」以前の根源的な統合化としての「原事実」に根差すものであることを説かれた。さらに、「私」以前の意味贈与という論点とフッサールの目的論的歴史との連関を辿り直す一方で、現代の歴史的状況をふまえつつ異文化理解の可能性の条件を「混血」や「文身」としての身体性というユニークな視点から描き出すことによって、西田の歴史的身体に対応しうる発想を現象学の側から提示された。最後に須藤氏は、ニーチェの身体理解の独自性を生命の自己解釈との連関において際立たせた上で、そこから引き出される道徳と芸術の位置づけを示すことによって、西田哲学と接し、うる点を示唆された。氏によれば、ニーチェにおいて、人間身体の特徴は、身体状態の自己解釈であるのにその解釈内容が身

う「事象そのもの」とは「現象が・現象化してくる」という動的事態の全体を指しており、とりわけ現象化という「動詞的」な運動が現象学という「名詞的」な事態に対し超越論的な位置にあることを確認した上で、では「身体が・身体化してくる」というのはいかなる事態なのか、といふ問いを立てられた。そして、いわゆる「キネステーゼ的意識」が一方では「物」という名詞的な現象を手引きとしつつ、他方では「私」以前の根源的な統合化としての「原事実」に根差すものであることを説かれた。さらに、「私」以前の意味贈与という論点とフッサールの目的論的歴史との連関を辿り直す一方で、現代の歴史的状況をふまえつつ異文化理解の可能性の条件を「混血」や「文身」としての身体性というユニークな視点から描き出すことによって、西田の歴史的身体に対応しうる発想を現象学の側から提示された。最後に須藤氏は、ニーチェの身体理解の独自性を生命の自己解釈との連関において際立たせた上で、そこから引き出される道徳と芸術の位置づけを示すことによって、西田哲学と接し、うる点を示唆された。氏によれば、ニーチェにおいて、人間身体の特徴は、身体状態の自己解釈であるのにその解釈内容が身

体それ自身に帰属させられないような解釈が生じうるという点にある。不調な身体がこうした自己否認的解釈をくり返すことによって成立するのが道徳である。しかし、そうして不調な身体が延命されると、いつかは身体に回復不可能な失調がもたらされるので、この身体の危機を救う「対抗運動」が求められねばならない。それがニーチェの考究の芸術であり、そこでは意識下に押しとどめられていた感覚が再賦活され、「花開く身体の力」に押し出されて形象の世界へと溢れ出るのだ、と須藤氏は主張された。

以上のそれぞれに充実した内容を含んだ提題をめぐって、シンポジスト間およびフロアとの間で活発な議論と質疑応答が展開された。

以上のそれぞれに充実した内容を含んだ提題をめぐって、シンポジスト間およびフロアとの間で活発な議論と質疑応答が展開された。その詳細は紙幅の都合上割愛せざるをえないが、もつとも重要な論点は、三つの提題で示された身体論が、はたして西田が身体においてみてとする非連續的な契機、とりわけプラトーンのいう「死の練習」にも通じるような絶対否定的な局面を十分に汲み取ることができるのか、という問い合わせであったと思われる。西田がみてとった身体のあり方が、現代西洋思想において豊かに花開いた諸々の身体論の洞察とシンクロする点を多々含みつつも、あくまでそれを取り込まれることを拒む面を残しているとしたら、そのことは一体何を意味するのか。この問題は、本シンポジウムが残した宿題であるといえよう。

(文責: 杉村靖彦)

プレカンファレンス

外国語セッションをめぐって

林 永強
(香港教育学院)

西田哲学会第八回年次大会では七月二十四日に明治大学にて、プレカンファレンスの開催された。その題目は「Nishida Kitaro's philosophy」-「Pure experience」, "junsui keiken", "expérience pure", "reine Erfahrung"-James, Nishida, Merleau-Ponty, and Husserl in question-」などだった。西田の熱弁、癡狂ぶりが印象的だった。

またその後の活発なディスカッションが行なわれた。当日は猛暑日にもかかわらず、日本各地や、海外からの研究者も見られた。約四十名の出席者により、西田哲学をめぐる論争を加え、西田哲学会をさらに熱く盛り上げた。ローラン氏の発表は西田幾多郎の個物という概念を取り上げ、前期・中期から、後期にかけて、どのような変化があるのかと考察する。西田の思索において、個物は単なる一つの副産物ではなく、一般者の支配から解放されるとローラン氏が指摘する。ダリシエ氏の発表は「純粹経験」をめぐって、ジエイムズ、西田、メルロ・ポンティ及びフッサールの見解を比較する。西田の「純粹経験」は、「毫も思慮分別を加えない、真に経験其儘の状態」と定義する。その際には、判断(judgment)、意味(meaning)や存在(being)から断裂させるように見られる。だとすれば、われわれはどういうに哲学的に「純粹経験」を説明できるのかとダリシエ氏は論究する。

さて、外国语セッションは二〇〇八年から実施しており、今回は第三回目である。初回は石川県の西田哲学会館にて開催された。私自身最初はどのようにかと一個人の発表者として困惑していた。しかし当日は、約四十名の出席者がおられ、様々な心配が一掃された。翌年においても、京都大学にて同様に大勢の人々に足を運んでいた。そして、今年明治大学での大会も、沢山の方々のご支持をいただいたお陰で、有意義な外国语セッションを開催することができた。

言うまでもなく、外国语セッションという試みは、簡単に成功させることができない。日本国内の各々の学会においても、外国语セッションは希少である。それでもかかわらず、西田哲学会は一切後退がなく、三年連続で外国语セッションを開催し、今後も続く見通しである。それは西田哲学の特徴、研究状況、また西田哲学会の発展にも関連するであろう。

周知のように、西田は「哲学」を「人生問題そのもの」に(再)定義し、西洋哲学と対決しようとしているが、特殊性のみを強調する日本やアジアの哲学を構築する意図はないだろう。『日本文化の問題』に附加した「学問の方法」という論文の中で示したように、西田は特殊性ではなく、「物の真実に行く」という意味を日本やアジアの哲学を構築する意図はないだろう。

西田哲学会の発展に携わっている。西田哲学会は日本国内の学会にとどまらず、「国際化」指向、国際的な学会を樹立し、世界各地の研究者との交流の場になる可能性をもつ。それはまさに「世界」と共に「物の真実に行く」とことと一致している実例である。

また、外国语セッションは、文字通り日本語以外のセッション、あるいは日本語以外の議論で発表する場を設ける必要がある。外国语セッションは、外国语での西田研究を紹介するのみならず、日本語での研究と交わり、知的交流という意義をも含んでいる。西田哲学は、世界から、また世界への発信をしなければならないと思われる。

次に、外国语セッションの必要性といえば、西田哲学の多様性と関連しているのである。西田は西洋や東洋の哲学を受容、対決しながら、自らの哲学を創造しようとする。例えば、科学哲学、芸術哲学などにも関心を持ち、それぞれの哲学の諸分野に没頭した。西田は「物の真実に行く」という姿勢を示しながら、多様性をも展開させている。外国语セッションにおいては、外国语にてそのような多様性を論じ、また議論すべきである。

今後も、西田哲学研究や西田哲学会の発展のために、外国语セッションにおいて活発に議論発展という趣旨をさらに満たせることになるだろう。

講演会報告

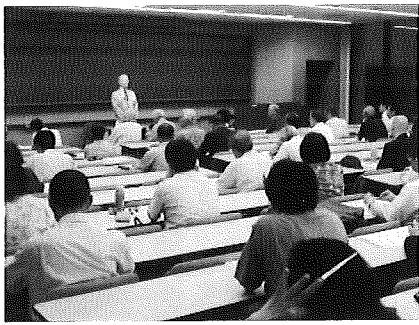
第八回年次大会の一日目には、十四時から十七時まで、竹村牧男氏(東洋大学学長)から「西田先生と私 運命的緊張の永続」と題されたご講演を、続いて今道友信氏(東京大学名誉教授)から

「西田先生と私は逆対応から平常底へ」と題されたご講演を、続いて今道友

信氏(東京大学名誉教授)から「西田先生と私は逆対応から平常底へ」と題されたご講演を、続いて今道友信氏(東京大学名誉教授)から「西田先生と私は逆対応から平常底へ」と題されたご講演を、続いて今道友信氏(東京大学名誉教授)から「西田先生と私は逆対応から平常底へ」と題されたご講演を、

竹村牧男氏は、仏教学・日本仏教を主たる研究分野とされ、いままでに『唯識三性説の研究』『正法眼藏講義』『入門』『哲学と仏教』など、また西田哲學に関係したものでも『西田幾多郎と仏教』『西田幾多郎と鈴木大拙』など、多数の著作を刊行されている。このたびのご講演では、西田が最晩年の論文『場所的論理と宗教的世界觀』において、どのような宗教哲学を行っているのかについて、これまでに単なる口頭発表だけではなく、外国语での論文をも掲載し続け、出版物を通して西田哲学研究をより一層飛躍させたい。

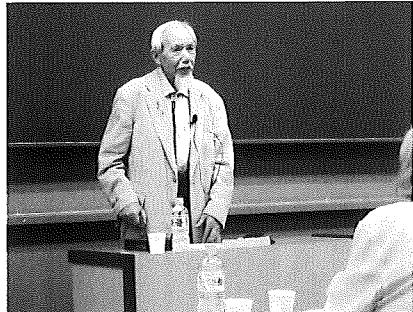
竹村氏は、西田が宗教について



講演「西田幾多郎の禅思想をめぐって」竹村牧男

て思索するに際して、鈴木大拙といかなる交流をしたのか、そこにどのような意味があるのかをときほぐすことで、「逆対応」「平常底」の内実について説き明かされた。そして、大拙の言う「超個の個」や「無分別の分別」や、また白隱の思索を参照しつつ大拙が提唱する、静的ではなく、すぐれて動的に生き生きと働く禅者のありようを、西田の示す「逆対応」や「平常底」のありように重ねて提示された。

ご講演は聴衆一人ひとりに各々の主体的な思索を誘うものであり、ご講演後の質疑応答も活発なものとなつた。竹村氏は、すでに多くの偉大な学術的な用語を多用することもされず、そうした成果を前提とすることも、あるいは既存の学術成果を残しているにもかかわらず、そうした成果を前提とする



講演「西田先生と私」今道友信

基礎的な事実からあらためて思索を始め直すかのごとくにお話をされた。そして西田の宗教への思索をめぐって、何が問題とされるべきであり、またご自分で何が問題として残されているのかについて誠実に提示された。ご講演は聴衆に深い感銘を与えるものとなつた。

たこと、しかしその後、西田の最晩年に、鎌倉の西田邸を数度訪れる機縁に恵まれ、それが西田にとって訪問者と哲学的な議論をした人生最後の時であった。うことが紹介された。

さらに今道氏は、西田邸での哲学的な議論の内容を示しながら、とりわけ、アウグスティヌスによる歴史をめぐる思索に向かい、その内実と意義とを掘りむという課題を西田から示されたことを説明された。また、そのことは今道氏の哲学的な思索をその根底において今まで導くものであつたことを示された。そして最後に今道氏は、「同一性の自己塑性と差異性の自己展開」をめぐってきただご自分の

これまでの哲学的な思索が、西田哲学における、述語となつて主語とならない「場所」をめぐる思索と深く重なり合うものであることを明らかにされた。

多くの偉大な成果を生み出してきた今道氏の哲学的思索の途行きが、西田哲学との、あるいは西田その人との運命的な緊張は、西田は西田の人との運命的な緊張の中内にあったことを、今道氏は一語一語かみしめつつ、深く静かに伝えられ、会場は感動に包まれた。時に声をつまらせ、まさに今ここに西田との出逢いを生き、その運命的緊張を体験している今道氏のたたずまいは、聴衆の中に深く刻み込まれた。

近、このような方はあまり目立たなくなってきた。一方、若くして参加された方の中には芸術・心理学・経済学・宗教で現在活躍されている方がいる。一冊の本「善の研究」を基にして、哲学の△外部△へと可動しているかの様相である。

合宿での深夜まで続く自由討論は楽しみである。話題は軽くはじまり、ある種の広範なそれでいて一般的な現実への関心が、つまり△出来事△への関心が長々と話し合われる。今こそ、哲学が、声高になりそうになるが、いずれにしてもこれらの人とともに哲学を△作る△気持ちになつたりした。だが時代は

性の自己塑性』『美的の位相と芸術』『エコエティカ』近年でも『中世の哲学』『今道友信　わが哲学を語る』など多数の著作が刊行されている。このたびの講演では、西田哲学との出逢いが、中学生の今道氏に大きな意味を持った出来事であったこと、そして敗戦に向かう日本の姿を前にして、西田哲学の意識論的色彩に疑問が生じ、いったんは西田哲学への憧憬が失われ

エッセイ

宇ノ氣に立ち戻る

今野康久

私の今年の修了証書番号は一六〇四です。足繁く二十九年のもの長き、石川県西田幾多郎記念哲学館での夏期哲学講座を通つたので、すこし振り返つてみる。

四日の研修を受ける。因みに
今年は△書斎における西田△
△人格△△美学△△技術△△妻
現△△眞実の自己△が議論され
た。これらの言葉にこれまでと
は大きな変化はない。勿論△純
粹経験△△絶対無△は外されざ
に話し合っている。

さて、われわれ参加者は多く
のことが許されているからな
か毎年多才な方が来られる。た
とえば性急に語句の意味を探り
突然に高揚して、失墜する。最

述懐をつづければ、これまで
も魅力のある方が来られた。そ
して今年、私が主催をしてきた
関西在住の修了者を中心とした
学習会も終えた。忘却した人・
惜別の人は思索の痕跡となっ
た。

すべてわれわれは冷徹で純粹
な西田の思索にへ熱狂▽した

いこもそうであるように乗り起
えられぬ困難さにある。地道で
もあるへただ一途にエロースを
めざし、哲学的な談論に親しむ
ことに、その生をささげる▽
〔「ペイドロス」二五七-B〕こ
と想起すること、そのように哲
学することが祭儀に結びつけら
れる。

り、又はいつでもそのことを奔放に投げ出したりしてきた。哲学することを修めたのだろうか。まだ本質的なものと撞着してはいないのではないか。つまり字ノ氣に向かう、字ノ氣に立ち戻ることは、われわれが哲學へと純化すること、哲學へと眼を外さない賭けを果しつづければならないことなのだ、といささか控えめに感得する。

いります。原則として第四土曜日の午後三時から六時までですが、都合で日程が変更になることがありますので、関心のある方は左記の事務局までご連絡ください。次回の開催日時、開催場所、テキストをお知らせいたします。また、当研究会では毎年、研究会誌『場所』を発行しています。

(二) 来年度大会

既に総会で告示された通り、

城阪真治（大阪大学非常勤講

『西田哲学会年報』掲載 論文の公募について

『年報』巻末の応募要領にしたがってご投稿ください。たくさんの応募をお待ちしております。

「年次大会」における 口頭発表の応募について

第九回年次大会（平成二十二年七月開催）の口頭発表者を公募します。応募者は三月末までに、八〇〇字程度の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局へお申し込み下さい。

(ii) 研究計画(八百字程度)

切りとさせ
お『年報』
参照下さい。

左京区吉田本町、京都大学
学研究科、氣多雅子研究室
(iii) 締め切り

二年以内に、研究計画報告書を提出していただくことがあります。報告形態は、刊行物のコピー、抜き刷り、あるいは四千字程度の報告文書とし、提出先は上記の気多町

研究室とします。

編集後記

案内は、基本的にメールで行ないますので、参加ご希望の方はこのアドレスへご連絡下さい。

幹事・秋山克哉 (akitonni@kit.ac.jp)

秋の理事会が、平成二十二年十一月七日（日）、京都工芸織維大学で行われた。出席理事は十一名、委任状提出による欠席理事九名、幹事二名であった。主な議題は、新会長の選出と来年度大会についての審議であり、議長は秋富が務めた。

理事会報告

東京都杉並区荻窪四一五
一一七〇一
西田哲学研究会事務局
nishidaphi@mx9.ttcn.ne.jp

大橋前会長の退任を受け、規約に基づき、理事による互選の結果、松丸壽雄理事が前回一致で新会長に選出された。松丸新会長の任期は、第三期の残任期間二年である。

一九〇九年度、第四回の西田
哲学研究基金公募には五名の応
募があり、厳正な審査の結果、
以下の二名に、それぞれ三十万
円を交付しました。

許祐盛氏（韓國慶熙大学哲学
部）、研究計画：「韓國における
西田哲学研究—その歴史とボテ

「西田哲学研究基金」について

予定の「かほく市メスキルヒ市共同シンポジウム」（従来は三月に行われてきた）の日程を七月十八日（月・海の日）に移動させて開催する案が検討され、承認された。さらに、初日のプレカンファレンスとして行われている『善の研究』の講読を二つのグループに分けること、外國語セッションを三日目の午前に移して行なうことが、それぞれ確認された。

城阪真治（大阪大学非常勤講師）、研究計画：「後期西田哲學における歴史的境界の空間論」
今年度も、引き続き交付基金を公募します。一件につき三十万円から五十万円で、数件の採択を予定しています。下記の要領で応募下さい。審査結果は、『年報』で報告します。

編集後記
十一月の理事会報告、新会長の挨拶などを掲載したため発行が例年より一ヵ月ほど遅くなりました。充実した会報をお届けすることができることを感謝しています。

編集後記

方実しか会報をお届けすることができる
ことを感謝しています。

西田哲學研究会〔於東京〕の
ご案内

□案内